



同志社 歴史散歩 今治

飯 義 寿

蘆花と今治

戦後、同志社の宗教主任を務めていた私の長男飯 清が、もう後一カ月で学徒出陣だという時に今治教会で結婚式をした。そのときの仲人役が田窪信夫という花嫁の父滝稻生の友人であったが、その田窪君によって戦前「蘆花と今治」という冊子が編著せられた。その中に今治教会の副牧師であり、後東京外国語学校の校長になった村井知至の「蛙の一生」という一文がある。「熊本バンドの血盟の士は、明治十二年六月、同志社の第一回卒業生として世に出たが、宮川経輝は近畿に、金森

通倫は中国に、横井時雄は四国に、海老名弾正は関東にという風に天下を四分し、一挙に十字の旗下に民衆を摩けくれんず勢で昇天の意気を胸間に湛えつつ堂々とその任地に乘込んだのであった。その中でも華々しき戦闘ぶりを示して天下にその名をあげたのは横井時雄氏で、今治は忽ちにして氏の征服を受け、一年を出ざる中に二百有余の信者ができ、日本における最も盛んなるキリスト教の伝道地として今治の名は海外にまで轟くに至った。」

蘆花の「黒い眼と茶色の目」の文章を借ると「又雄(横井時雄)さんは濠洋の波のヒタヒタと寄する予州の浜辺に数百の信者を作り、大きな会堂を建ててその教会の評判は遠く海外に馳せ、米国から祝意を表してワザワザ音のよい大きなベルを贈ってきたほどの成績をあげたのである。十八年の春又雄さんに連れられて郷里の熊本から伊予に行つて日曜の朝夕、水曜金曜の夜ごとに、そのベルのよい音を啓二(蘆花)は聞いた」とある。

進取の気象

同志社神学校を卒業一年前にやめて、横井牧師の許で勉強しようとする今治教会の伝道師になった村井知至と、熊本で洗礼を受けて直ぐ

従兄の横井時雄牧師に今治へ連れて来られた蘆花は、一緒に今治で教会の英語学校の先生をした。明治十八年のことで、そのころの物価は、牛肉一斤(二六〇匁)が三銭五厘ないし五銭で、教会人はよく食べたらしい。今治から大阪までの汽船の運賃が二十銭でご馳走を食べさせ、お土産に洋傘一本をくれるというのにも驚く。これは蒸汽船であるが、汽船が航海する明治九年ごろより前は、私の祖父吉田屋忠太郎(吉忠)の経営する手押し和船が数隻通つていた。三丁櫓のこの船は主として荷物を運搬したのであるが、もちろんお客も二、三人は便乗できたわけで、その運賃は片道一人一円で他に白米一日一升を持参したという。大阪まで和船で漕いで行くというのは今の人間には想像もできぬことだろうが、支那沿岸まで漕いで行った海賊船(八幡船)の本拠である来島海峡に面した今治付近には、そうした力量を持つ人々、精神的にいえば進取の気象に富む人が沢山いたことが了解せられよう。このことが四国で一番早くキリスト教会ができて、伸びて行った理由の一つだと私は何時も説明している。

教会の八十年史

三十年余り前、菅原牧師の時代に今治教会の五十年史を作るとき、私はちょうど同志社図書館の司書をしていたので、そこにある「七一雑報」等古記録を筆写してその資料を提供した。創立前後の比較的古い記録が詳しいのはそのためである。一人息子の私は家業の後を嗣ぐまで、そして「今治教会の柱石となってくれ」と海老名総長の委付を受けて帰るまで、私は文学、美術、神学、天文学、法律の勉強を同志社でして帰り、病気になるまで三十余年を家業のかたわら今治教会のSSの校長をした。「八十年史」は自ら編集委員長として奉仕をした。したがって歴史散歩的な記憶はかなり沢山持つておるが、さて今治と同志社となると文献的には「五十年史」と「八十年史」を並べてみるよりない。

茶色の目

新島先生の奥様は山本覚馬氏の妹であることは衆知のごとくであるが、山本覚馬の娘お峰は横井牧師の夫人で、その結婚式は山本邸で行なわれ、司式はラルネット氏。横井時雄の妹みや子は海老名弾正と結婚し、その挙式は今治で新島先生の司式で行なわれた。さらに蘆花の母上久子の妹節子は横井小楠の夫人

であり、横井牧師の母上であるから、蘆花は横井牧師の従弟で、これらの人々の今治往来は繁かったようである。有名な矢島かじ子も蘆花の母上の妹で全く偉い姉妹が揃ったものだと思う。「茶色の目」は山本覚馬の愛人(妾)の娘久栄ということで、彼女との初恋が実を結ばなかったことが、蘆花が同志社を卒業前に中退した理由らしい。

伝道の歴史

さて今治伝道は、明治九年、神戸在駐、英人宣教師アッキンソンおよび通訳鈴木清の来今にはじまる。この鈴木氏は大沢徳太郎氏の夫人幸恵姉の父上、すなわち武間同窓会長の祖父にあたるわけである。今治伝道は、その後順調な成長を遂げ、十二年六月横井牧師の着任とともに具体化し、教会創立は同九月二十一日新島先生による授手礼と、アッキンソンによる六人の授洗からはじまり、忽ち数百人の信者を得て、松山、小松、西条の各地の支教会を独立せしめ真に隆々たる有様であった。特に明治十七年同志社におこったリバイバルは三月今治に波及し、その一年で二百人の授洗者があつたという。

明治十九年海老名弾正が本郷から熊本へ赴

任せられるや、その後任として横井牧師は今治から東京へ。その後任は山中百氏で、二十五年四月退任後長く同志社女学校の校長をせられた方である。三代目牧師露無文治氏は三十年在任されて、その子供さんは皆同志社を出られ、同志社にも信望厚く、私など同牧師の紹介状一本で無試験で入れて貰った。さて横井夫人お峰さん早逝の後には、神戸女学院卒業の柳瀬豊子と再婚したので、横井、海老名両家は今治の柳瀬家と姻戚となったわけで、海老名総長の娘あや子さんと結婚した大下角一は神学部長、大学長の期間を通じて非常に今治教会の面倒をみてくれた因縁も見逃してはならない。

今治教会から同志社へ行った者は随分沢山だが、最近では教会を通らないで同志社へ行く人が多いので、それらの人人がうまく新島先生の信仰と愛国心を身につけてくれるであろうことを祈らずにはおれない。女子大学長越智文雄君、神学部教授飯峯明君などが今治出身であることも付記しておきたい。

(校友会今治支部長・吉忠回漕店社長)